新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第一章（だいいっしょう）　信心（しんじん）の基本（きほん）

功徳（くどく）

「もし悩乱する者は頭七分に破れ、供養することあらん者は福十号に過ぐ」

（012 四信五品抄）

功徳270ページー8行）

「もし正法を誹謗する者は頭が七つに破れ、反対に法華経に供養する者は十号（十種の仏の尊称）をそなえた仏にまさる功徳福運に恵まれるのである」

国中の疫病は「頭七分に破る」なり。罰をもって徳を惟うに、我が門人等は「福十号に過ぐ」疑いなきものな

り。

（012 四信五品抄（ししんごほんしょう）

功徳（くどく）270ページー12行）

しかれば、善男子と申すは、男この経を信じまいらせて聴聞するならば、提婆達多程の悪人だにも仏になる。まして末代の人は、たとい重罪なりとも、多分は十悪をすぎず。まして深く持ち奉る人、仏にならざるべきや。

（016 主師親御書

功徳 323ページ-9行）

この娑婆世界は耳根得道の国なり。以前に申すごとく、「当に知るべし、身土」云々。一切衆生の身に百界千如・三千世間を納むる謂れを明かすが故に、これを耳に触るる一切衆生は功徳を得る衆生なり。

（020 一念三千法門

功徳363ページ-1行）

この娑婆世界（現実社会）は、耳で仏法を聞いて成仏する国土なのです。前にも述べたように「当に知るべし、身土は一念三千なることを」といって、法華経はあらゆる衆生に身に百界、千如、

三千世間（さんぜんせけん）をおさめるとの意味（いみ）を明（あき）らかにしているので、この法門（ほうもん）を耳（みみ）にしたすべての人（ひと）びとは、かならず功徳（くどく）を得（え）るのです。

「一念信解（いちねんしんげ）」の功徳（くどく）は五波羅蜜（ごはらみつ）の行（ぎょう）に越（こ）え、「五十展転（ごじってんでん）」の随喜（ずいき）は八十年（はちじゅうねん）の布施（ふせ）に勝（すぐ）れたり。

（030 持妙法華問答抄（じみょうほっけもんどうしょう））

功徳（くどく）515ページー2行）

今(いま)、日蓮等(にちれんとう)の類(たぐ)い、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(とな)え奉(たてまつ)るは、
生死(しょうじ)の闇(やみ)を照(て)らし晴(は)らして、涅槃(ねはん)の智火明了(ちかみょうりょう)なり。
（095 御義口伝(おんぎくでん)
功徳(くどく)987ページー6行）

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と信受・領納する故に、「無上宝聚　不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずから得たり）」の大宝珠を得るなり。

095 御義口伝

功徳 1012ページー5行）

いま日蓮とその門下が、御本尊にむかって南無妙法蓮華経を唱えることが成仏の根本であると信じ納得することは、法華経信解品に「無上の宝珠、求めざるに自ずから得たり」とある、その大宝珠を得たことになるのです。

「宝聚（ほうじゅ）」とは、三世（さんぜ）の諸仏（しょぶつ）の万行万善（まんぎょうまんぜん）・諸波羅蜜（しょはらみつ）の宝（たから）を聚（あつ）めたる南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）なり。この無上宝聚（むじょうほうじゅ）を、辛労（しんろう）も無（な）く行功（ぎょうく）も無（な）く、一言（いちごん）に受（う）け取（と）る信心（しんじん）なり。「不求自得（ふぐじとく）」とは、これなり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

功徳（くどく）1014ページー10行）

されば、妙法(みょうほう)の大良薬(だいりょうやく)を服(ふく)する者(もの)は、貪(とん)・瞋(じん)・癡(ち)の三毒(さんどく)の煩悩(ぼんのう)の病患(びょうげん)を除(のぞ)くなり。

（095 御義口伝(おんぎくでん)

功徳(くどく)1052ページ-17行）

「功徳」とは、「六根清浄」の果報なり。詮ずるところ、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「六根清浄」なり。されば、妙法蓮華経の法師と成って大いなる徳い有るなり。「功」も幸いということなり。または、悪を滅するを「功」と云い、善を生ずるを「徳」と云うなり。「功徳」とは、即身成仏なり。また「六根清浄」なり。

（095 御義口伝

功徳 1062ページ－10行）

功徳とは六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）にそなわった煩悩が払い落されて清らかになった姿です。結局、日蓮とその門下が、南無妙法蓮華経と唱えれば六根清浄となるのです。したがって、妙法蓮華経の法（御本尊）を自行化他に行ずるところの師となって大きな功徳があるのです。功徳の「功」とは幸いということです。または悪を滅することを「功」といい、善を生じることを「徳」というのです。最高の功徳とは即身成仏であり、また六根清浄なのです。

いわゆる、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）と唱（とな）え奉（たてまつ）るは、即（すなわ）ち「自在（じざい）」なり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

功徳（くどく）1097ページ－17行）

法華経(ほけきょう)は一文一句(いちもんいっく)なれども耳(みみ)にふるる者(もの)は既(すで)に仏(ほとけ)になるべき成

（104四恩抄(しおんしょう)

功徳(くどく)1213ページ－11行）

されば、鹿は味ある故に人に殺され、亀は油ある故に命を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。国を治むる者は他国の恐れあり。財有る者は命危うし。法華経を持つ者は必ず成仏し候

（107　種々御振舞御書

功徳1246ページー16行）

この度(たび)は、大海(たいかい)のしおの満(み)つるがごとく、月(つき)の満(まん)ずるがごとく、福(ふく)きたり、来(ふく)命(いのち)ながく、長(ながく)後生(ごしょう)は霊山(りょうぜん)とおぼし(思)めせ。

（117 真間釈迦仏御供養逐状(まましゃかぶつごくようおいじょう)

功徳(くどく)1274ページ-13行）

たとい科有る者も三宝を信ぜば大難を脱れんか。

（136 道場神守護事

功徳1321ページ－10行）

いかにとして候(そうら)やらん、彼(かれ)らよりもすくなくやみすくな少病少
く死(し)に候(そうろう)は、不思議(ふしぎ)におぼえ候(そうろう)。人(ひと)のすくなき故(ゆえ)か、
また御信心(ごしんじん)の強盛(ごうじょう)なるか。

（139 治病大小権実違目(じびょうだいしょうごんじついもく)

功徳(くどく)1331ページ－16行）

商那和修（しょうなわしゅ）と申（もう）せし人（ひと）は、裸形（らぎょう）なりし辟支仏（しゃくしぶつ）に衣（きぬ）をまいらせて、世々生々（せぜしょうじょう）に衣服身（えふくみ）に随（したが）う。

（154 太田殿女房御返事（おおたどののにょうぼうごへんじ）（八寒地獄（はっかんじごく）の事（こと））

功徳（くどく）1370ページー5行）

「讃(ほ)むる者(もの)は福(ふく)を安明(あんみょう)に積(つ)み、謗(そし)る者(もの)は罪(つみ)を無間(むけん)に開(ひら)く」

（162 曽谷入道殿許御書(そやにゅうどうどのもとごしょ)

功徳(くどく)1409ページ－12行）

これ程に貴き教主釈尊を、一時二時ならず一日二日ならず一劫が間、掌を合わせ、両眼を仏の御顔にあて、頭を低れて、他事を捨てて、頭の火を消さんと欲するがごとく、渇して水をおもい飢えて食を思うがごとく、間無く供養し奉る功徳よりも、戯論に一言、継母の継子をほむるがごとく、心ざしなくとも、末代の法華経の行者を讃め供養せん功徳は、彼の三業相応の信心にて一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給いて候。

ほど　たっと　きょうしゅしゃくそん　いっときふたとき　いちにちふつか
いっこう　あいだ　たなごころ　あ　りょうがん　ほとけ　おんかお　当
こうべ　た　たじ　す　こうべ　ひ　け　ほっ
かっ　みず　思　う　じき　おも
ひまな　くよう　たてまつ　くどく
けろん　いちごん　ままはは　ままこ
ぎょうじゃ　ほ　くよう　くどく　か　さんごうそうおう　しんじん
いっこう　あいだしょうじん　ほとけ　くよう　たてまつ　ひゃくせんまんおくばい　過
と　たま　そうろう

（164 法蓮抄（ほうれんしょう）

功徳（くどく）1418ページー1行）

「陰徳あれば陽報あり」

（217 陰徳陽報御書

功徳 1613ページー2行）

陰徳（かくれた善行）があるならば、陽報（はっきり現れる善い報い）があります。

幾
いくそばくぞ御内の人々そねみ 候 らんに、度々の仰せを
返
かえし、よりよりの御心にたがわせ給えば、いくそばくの
讒 言
ざんげんこそ 候 らんに、度々の御所領をかえして、今ま
た所領給わらせ給うと云々。これ程の不思議は 候 わず。
これひとえに、「陰徳あれば陽報ありとは、これなり
（218 四条金吾殿御返事（源遠流長の事）
功徳 1614ページ－15行）

正像に益を得し人々は顕益なるべし、在世結縁の熟せる故に。今、末法には初めて下種す。冥益なるべし。

（239 教行証御書

功徳 1669ページー6行）

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功徳すら申すばかりなし。いわんや、日本国の一切衆生の眼をあけて候わん功徳をや。いかにいわんや、一閻浮提・四天下の人の眼のしいたるをあけて候わんをや。

法華経の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義を解せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。法華経を持つ人は一切世間の天・人の眼なりと説かれて候。

（242 乙御前御消息

功徳（くどく）
1691ページ－12行）

国中(こくちゅう)の諸人(しょにん)、一人(いちにん)二人(にんに)、乃至千万億(ないしせんまんおく)の人(ひと)、題目(だいもく)を唱(とな)うるならば、存外(ぞんがい)に功徳(くどく)身(み)にあつまらせ給(たも)うべし。その功徳(くどく)は、大海(たいかい)の露(つゆ)をあつめ、須弥山(しゅみせん)の微塵(みじん)をつむがごとし。集(つ)集(し)積(せき)

（251 妙密上人御消息（みょうみつしょうにんごしょうそく）

功徳（くどく）1712ページ－11行）

金はやけばいよいよ色まさり、剣はとげばいよいよ利くなる。法華経の功徳は、ほむればいよいよ功徳まさる。

（251 妙密上人御消息

功徳1713ページ－1行）

金は焼いて鍛えれば、いよいよ色がよくなり、剣はとげばいよいよよく切れるようになります。同じように法華経の功徳は讃嘆すればするほどますます勝れていくのです。

されば、この良薬を持たん女人等をば、この四人の大菩薩、前後左右に立ちそいて、この女人たたせ給えば、この大菩薩も立たせ給う。乃至、この女人道を行く時は、この菩薩も道を行き給う。譬えば、かげと身と、水と魚と、声とひびきと、月と光とのごとし。

（261 妙法曼陀羅供養事

功徳 1728ページー3行）

法華経を供養する人は、十方の仏菩薩を供養する功徳と同じきなり。十方の諸仏は妙の一字より生じ給える故なり。

（266 千日尼御前御返事（雷門鼓御書）
功徳 1745ページー5行）

日蓮を供養し、また日蓮が弟子檀那となり給うこと、その功徳をば仏の智慧にてもはかり尽くし給うべからず。

（280 諸法実相抄

功徳 1790ページー7行）

「かくれての信あれば、あらわれての徳あるなり」

（305 上野殿御消息（四徳四恩の事）

功徳 1850ページー13行）

たとえば表面に顕れなくても、心の奥底に信心があれば、その徳はかならず目に見えて顕れるものであると、いわれています。

須弥山に近づく鳥は金色となるなり

（310 本尊供養御書

功徳 1863ページー3行）

須弥山（古代インドの宇宙観で世界の中心に位置し、最も高いといわれた山に）に近づく鳥は金色に変わっていきます。

法華経を持ちまいらせぬれば、八寒地獄の水にもぬれず、八熱地獄の大火にも焼けず。法華経の第七に云わく「火も焼くこと能わず、水も漂わすこと能わず」等云々。

（310 本尊供養御書

功徳 1863ページー8行）

法華経（御本尊）を持っていたならば八寒地獄の水にもぬれず、八熱地獄の大火にも焼けることはありません。法華経の第七の巻の薬王品に「火も焼くことができないし、水も漂わすことができない」と説かれています。

「願わくはこの功徳をもって、あまねく一切に及ぼし、我らと衆生と、皆共に仏道を成ぜん」

（326上野殿御返事（竜門御書）

功徳1895ページー13行）

釈迦仏は「我を無量の珍宝をもって億劫の間供養せんよりは、末代の法華経の行者を一日なりとも供養せん功徳は百千万億倍過ぐべし」とこそ説かせ給いて候

（340南条殿御返事（法妙人貴の事）

功徳1923ページー15行）

釈尊は「私を無量の珍しい宝をもって、無限に長い間供養するよりも、末法の法華経の行者を一日でも供養する功徳は、百千万億倍も勝れている」と説かれています。

たとい十方三世の諸仏の怨敵なれども、法華経の一句を信じぬれば、諸仏捨て給うことなし。

（388 治部房御返事

功徳 2029 ページー8 行）

かかる御本尊を供養し 奉 り給う女人、現在には 幸 いを
まねき、後生には、この御本尊、左右前後に立ちそいて、
闇に 灯 のごとく、険難の 処 に強力を得たるがごとく、
かしこへまわりここへより、日女御前をかこみまぼり給う
べきなり。

（405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）
功徳 2087ページ－13行）

このような 尊 い御本尊を供養する女性は、今世には 幸 せを招き
よせ、衆 生 には、この御本尊が左右前後に立ちそって、あたかも

闇夜(やみよ)に燈火(とうか)を得(え)たように、また険難(けんなん)な山路(やまじ)で強力(ごうりき)（力(ちから)の強(つよ)い
従者(じゅうしゃ)）を得(え)たように、彼方(かなた)へまわり、ここに寄(よ)りそって、どこにあ
って日女御前(にちにょごぜん)のまわりを取(と)り囲(かこ)んで守(まも)るでしょう。